

2-4					
主題	排泄ケアにおけるスキントラブル予防				
副題	古い習慣からの脱却、「拭く」から「洗う」への転換				
キーワード 1	排泄ケア	キーワード 2	なし	研究(実践)期間	14ヶ月

法人名・事業所名	社福) 清心福祉会 ファミリーマイホーム
発表者(職種)	松山泰大(介護職員)、木口順弘(介護職員)
共同研究(実践)者	志村富和(介護職員)、山田典子(介護職員)、中村愛(看護師)、他

電 話	042-692-1121	F A X	042-692-1152
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	当施設は平成7年に開設した八王子市にある従来型特養です。特別養護老人ホーム100床、短期入所生活介護(ショートステイ)12床、通所介護(デイサービスセンター)30名定員となっております。施設の名のとおり、利用者様やご家族に寄り添いながら、「家族のようなお付き合い」を目指しております。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設では、長年排泄ケアの技術の業務マニュアルや見直しをしておらず、パット交換後に陰部洗浄をし、濡れた温かいタオルで拭くという「拭き取るケア」を続けていた。そのため、視覚的にはきれいにふき取れているように見えても、排泄物や分泌物による汚れや臭気があり、利用者様のスキントラブルが絶えない状況にあった。

そこで、利用者様のスキントラブルについて、使用しているオムツメーカーアドバイザーに相談し、使用方法・回数などの様々な検証を行った。排泄ケアの工程を見直したところ、いまだにパット交換後に温タオルで拭き取るケアを継続しており、拭き取っている時の摩擦と刺激がスキントラブルの大きな要因になっていることが判明した。そのため、排泄ケア全般の見直しを行うこととなった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

同一法人の特別養護老人ホームでは、すでに排泄ケアの見直しが行われており、その取り組みがオムツメーカーの季刊誌にも取り上げられていた。そこで、当施設においても利用者様のスキンケアの重要性を考え、従来の「拭き取るケア」から、洗浄ボトルを使って汚れを「洗い流すケア」に転換が必要であると考えた。オムツを使用している利用者様は、排泄物が皮膚に付着したままの状態が長く、常にスキントラブルの危険に晒されている。

利用者様の個別的なパットの工夫、トイレでの排泄ケアやオムツ交換回数の増加などの対応以外にスキントラブルを防ぐ方法として、陰部洗浄は大切なケアである。陰部洗浄後に濡れた温タオルを使用せず、乾いたタオルで水分を拭き取ることで、利用者様のスキントラブルの改善が図れるのではないかと期待して、業務改善に取り組んだ。

《3. 具体的な取り組みの内容》

①陰部洗浄対象者

- ・常時オムツ対応の利用者様 44名。2017年7月現在
- ・起床後のトイレ介助時にオムツを外す利用者様、オムツは使用していないが起床時にパッドに失禁している利用者様 25名。2017年7月現在

②取り組んだ期間

2016年5月から現在

③取り組みの具体的な手法

〈介護課職員への周知〉

排泄モニター(委員会)に属する介護課職員とオムツメーカーアドバイザーによる、排泄ケアの見直し(陰部洗浄導入)の趣旨説明と具体的なケアの研修会を開催。合計2回38名出席。

〈ケアの周知徹底するための実践〉

- ・排泄モニター(委員会)で作成した陰部洗浄イラスト付きマニュアルを作成し配布。
- ・介護職員とオムツメーカーアドバイザーの1対1での個別OJT研修での技術指導。
合計40回(35名出席)

〈ケア実践後の再確認〉

排泄モニター(委員会)に属する介護課職員とオムツメーカーアドバイザーによる、排泄ケア実践後の課題や疑問点を抽出するための勉強会を開催。合計1回12名出席

〈ケア実践後の評価〉

- ・取り組み前と実践後の利用者様のスキントラブルの比較調査。
- ・介護課、医務課職員への排泄ケア導入に対するアンケート実施。(40名提出)

《4. 取り組みの結果》

導入当初は、介護職員からも排泄ケアの手順が変わることへの不安、利用者様の身体的・精神的負担が増加するのでは、との意見が持ち上がった。しかし、利用者様のスキントラブルの減少や個別OJT研修を行うことでの排泄ケア技術の向上に伴う職員個々の自信から、現在はこの排泄ケアが通常対応となっている。

《5. 考察、まとめ》

昔から当たり前のように行っていた介護サービスについて、そのケアが現状に合っているのを見直すことは、勇気のいることである。新しい取り組みなどの業務改善を図るためには、現状を改善していきたいという前向きな強い思いが必要である。同時に職員の不安な気持ちを受け止め、そして不安の種を一つ一つ取り除いていくことも物事を進めていくにはとても重要である。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「ライフリーいきいき通信」(2016年夏号)ユニ・チャーム株式会社 ProCare 営業企画部

《8. 提案と発信》

介護サービスの専門性とは、様々な知識を学び技術を習得していくことは当然のことであるが、その知識・技術が目の前の利用者様にとって、最良のケアであるかどうかを選別していくことではないだろうか。